

【雨宿】あまやどり

太田道灌(1432～86)は上杉定正の重臣。武勇・兵法に有能な室町時代中期の武将として世に知られています。江戸城築城は有名ですね。

史実であるか否かはさて置き、彼には面白い逸話が残されています。

あるとき道灌は狩のさなか驟雨に見舞われ、貧しい百姓屋に雨宿りしました。

そこで蓑[ミノ]を所望したところ、家の幼い娘は蓑を出さずに微笑みながら山吹の花を差し出し頭を下げました。そのとき道灌は少女の意を解すことができませんでした。

後に、娘の意図は次の古歌をかけたものであることを知り、彼は大いに慚悔したと伝えられています。

・七重八重花は咲くとも山吹の 実の ひとつだに なき ぞかなしき

〔・八重山吹は咲いても実を結ばない花なのでかなしいことだ〕（・注 ヤエヤマブキ・シロハナヤマブキは実を結ばない。少女は「実の」と「蓑」をかけ、山吹を差し出すことにより「蓑がない」と返答したのです）

この雨宿りが契機となり、道灌は詩歌の勉強に励んだといえます。

そして、和歌・漢詩にも長けた人として武勇の名声に花を添えました。

事実、彼が江戸城に五山文学後期の僧、玉隠英瓊(ぎょくいんえいよ)・万里集九(ばんりしゅうく)を招き詩歌会を催した記録が残されています。

梅雨どきは一枝の山吹に小間を照らさせて、雨音を聴きながら道灌の故事を偲ぶのもよい茶趣となるでしょう。

・一村雨のあまやどり 日はまだ残るなかやどに かりねの夢を見るやと 邯鄲の枕に臥しにけり
謡曲『邯鄲(かんたん)』より

蜀の国に盧生という若者がいました。彼は人生に迷い、仏道の師を求めて羊飛山に旅立ちました。途中、邯鄲の里の宿で雨宿りをしたとき、宿の女主から不思議な枕を貸してもらい、粟飯が炊けるのを待つ間、盧生は仮眠につきました。

そこへ楚の国の使者一行がやって来て盧生を起こします。使者は帝からの譲位の勅を伝え盧生を都に迎えます。即位した盧生は五十年も在位し、帝として栄華を極めるのでした。

やがて、宿の女主に起こされ、一連の栄華は全て粟飯が炊ける間の夢の中だったことを知ります。茫然とする盧生はやがて人生の意義を悟り、故郷に帰っていきました。

これが、謡曲『邯鄲』のあらすじです。

雨宿りは不意の雨が上がるのをひたすら待つ間ですので、空虚な時間となりがちです。

しかし、それは必ずしも無意味な時間とは限りません。

道灌・盧生の人生に、転機となるほどの体験が雨宿りの間に起こることもあるのです。

雨宿りは物事を先に進めず休止するひとときです。茶を喫するひとときも同じでしょう。

こうした非生産的時間の底知れぬ価値は、誰よりもお茶人の皆様方がご存知のことでありましょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~